

今は島陰と落陽の位置が一番いい時で、その景色を写真に撮るために石岳の周辺には夕方にカメラの放列がみられます。空を海を茜色に染めて太陽が五島灘に落ちてゆき、素晴らしい夕映えの九十九島を眺めることができます。

佐世保市の行政区域内の島を「南九十九島」と呼んでおりませんが、明治時代はその島々は山口村（相浦町）の管内でした。明治十七年に出た『北松浦郡村誌』には六十九の島の名前、大きさが記録されており貴重な資料です。

九十九島の中で人が住んでいるのは「黒島」と「高島」ですが、当時の高島の戸数は五十一戸、男百五十一人、女百五十八人と郡村誌は記しております。

この海域は明治十九年に軍港域に指定され、美しい島々はベールにつつまれて戦後を迎えることになりました。

江戸時代に日野には塩田がありました。田淵・山口・前川・遠藤など七家族が赤



九十九島の夕景を狙ってカメラがずらり。
—船越展望台にて—

穂から移住をして塩作りに従事しておりました。「塩焚きの燃料として島の樹木は自由に伐つてよろしいと藩主から許しがあっていた」と言い伝えられており、その縁で明治時代になってから多くの島が日野触の村山（共有林）として登記がなされております。

牧の島、元の島などを除き島々の所有が佐世保市に変わるの昭和二十八年のことで、西海国立公園の誕生の前です。

日野触の人達の共有の島であった桂島や文ヶ島など十九の島の買収価格の総額は五十五万円であったと聞いております。

また、松浦ヶ島も同じ時期に佐世保市の所有となりました。以前の所有者は竹辺・浜田・末竹・宮嶋・池田などの名前が見え、船越触の人々の所有地であったことがわかります。

九十九島くじゅうくしま

2

江戸時代に書かれた「太宰管内志」は佐野常足の名著として有名ですが、その中に「肥前相ノ浦のならびに「しづの浦」とであり。(中略)道の記に相ノ浦しづの里とあるはこゝなり。俗にシツツと云う。

大崎に信田殿屋敷とて広き屋敷跡あり。彼の大崎には文祿のころ一部式部と云う者居住して九島の主たりしがその後大崎を改めて筑前にいたり…との一文があります。

文祿のころ(一五九〇年のころ)に大崎半島に屋敷を構えた「一部式部」が「九十九島の主」であったと記録しているのです。大潟町には「志田」の地名がありますが、地名の起こりは「信田」と考えられます。

九十九島を治めていた一部氏は生月の人であり、戦略上の重要な拠点である大崎と付近の海域を治めるために、平戸松浦氏が送り込んだ代官であったと思われ

ます。

戦国時代の終わり頃に、平戸松浦氏と大村氏によって佐世保方面の覇権をかけた戦いがあり、海戦が九十九島を舞台に行われております。

相浦港の付近に「舟がくれ」の小字が残っておりますが、深い入り江であり、兵船の絶好の隠れ場所であったと思われまます。そこを出た平戸方の戦船が大村方の待ち伏せにあい、「金重島」の周辺で激しい戦いとなりました。



美しい砂浜がある無人島「金重島」

平戸方の猛将「佐々加雲」は、金重に上がって切腹したと松浦旧記「印山記」は記しております。広雲の墓は彼の城であった広田城の前に残っております。

「金重島」は九十九島の中では大きな島で、美しい砂浜があり、夏は海水浴やキャンプで賑わいます。現在も「加雲岩」と呼ばれる岩を見ることができまます。